

多くのミッションに挑む朋栄の技術陣だが、IPやクラウドに詳しいメンバーがそろっているのか。「関連会社も含め、IPに通じた人材はかなり増えてきています」（清原氏）。それだけでなく、「海外も含め、自社にはない優れた技術とノウハウがある企業と協業を進めていきたい」と積極策を考える。そのために「米国をはじめとする海外拠点の役割に期待しています。技術動向の把握と人間関係のつながりは重要です。AMMUXとの連携も人間的な信頼がベースでしたから」と話す。

### 「社名に込めた『お客様と朋に栄える』の姿勢」

メディア環境の変化で大きな岐路に立っている放送業界。清原氏は「私は映像コンテンツのサービスの本質は、視聴者楽しんでいただくことに変わりはないと考えています。そのために信頼性の高い映像コンテンツの用意と、届ける方法の多様化に円滑に対応するために、放送局やプロダクションのお客様の話を聞き、考え、新たな提案をすることが、映像制作機器メーカーの役割だと考えています。そこからもう一歩踏み込んだ関係を生み出したい」と話し、『お客様と朋に栄える』という社名の原点に立ち返りつつ今後の方向性を示した。



## 見えてきた「クラウド」活用



LED大画面がエントランス正面でアピールする新しいWest Hall

### ● 2015年に見た「SDI is dead」宣言

「5年以上も前の2015年、ヨーロッパ最大の放送機器展であるIBCの会場に衝撃的なメッセージがあった――

『SDI is dead』と、昨年のInteropで議論された放送システムへのインパクトを本誌は書き出した（掲載号：2021年7月号）。翌2016年のIBCでは「SDI MUST DIE」、 「HARDWARE IS DEAD」となり、「SDI over IP」、 「Media over IP」の提案が広がった。

本誌編集部は、2016年12月に『IPライブ伝送制作システムの解説書』を発行、シリーズとして4冊を刊行するなど、IPライブ制作の動向を伝えてきた。

### ● 「クラウド」への流れを示したNAB 2022

ラスベガスコンベンションセンターは大きい、NAB展示ブースの一等地はCentral Hallのメインゲート正面である。そこにグラスバレーが「メディアユニバース」を掲げ、「GV AMPP」をアピールした。クラウド・ネイティブ・プラットフォームで、クラウドベースのライブ・プロダクションのニーズを念頭に、フレーム精度やレスポンスなどの対応を含めながら「放送システムの今後」を示した。

グラスバレーで注目を集めたのが、3月のAndrew Cross氏のCEO就任だろう。氏はVizrt、NewTek、およびNDIの3ブランド開発でグローバルR&Dの社長を務めた経歴から、メディア制作の未来ビジョンをどう提示するのか。9月開催のIBC（欧州放送メディア展）を見逃せない。

クラウド巨人のAWS（Amazon Web Services）は何を訴えたか。編集部は、2020年9月発表の非圧縮ライブ動画を転送する「AWS Cloud Digital Interface（CDI）」に注目する。8ミリ秒という動画1フレーム未満の短いレイテンシーで、アプリケーション間の動画データを送信できる。AWS Elemental MediaLiveがAWS CDI入力をサポートするので、ライブクラウドで高品質・低レイテンシーの入力ができる。クラウド利用の基本が確立したと言える。

「Azure」サービスでAWSと拮抗するマイクロソフト（MS）。NABブースは静かだったが、ゲーム会社アクティビジョン・ブリザードの買収8兆円という戦略があり、今後エンタメ分野のプラットフォームに何を提案するのか。「eスポーツ」分野を得意とするブリザードを考えると、CEOサティア・ナデラ氏が「現在、ゲームはあらゆるエンタテインメントの中で最もダイナミックでエキサイティングなカテゴリー」と期待するのもうなずける。